

の1人となる。いい気持で寝ていたところ友達にゆり動かされ、気がついてみると阿寒湖畔に来ていた。昼食の後、遊覧船に乗る。この阿寒湖上に沈んだり浮いたりしている美しい緑色のマリモが、見られるものと思つていたのに、ここへ来る途中マリモ保護の為、チュウライ島の保護施設に送られたことを聞き一同ガツカリ。行つてみると水槽の中に入れており、直径1cm位の小さいものから20cm位あるかと思われる大きなものまで案外沢山あつた。さわりたいような気もする、美しいピロード状の表面である。ここにも数々の思い出を残し、バスは一路今夜の宿泊地十勝川温泉へ。

## 十勝川から襟裳岬を経て、登別へ

### 大食3

7月23日

昨晚「てるてる坊主」を放つたらかしくしておいた報いか、今日は空がどんよりと曇り、小雨が降っている。旅行も今日で9日目、そろそろ疲れが出て、昨日の夜は早くから寝てしまった。「色白の美肌」になるという、この十勝川温泉にもゆつくりと入浴しなかつたのか、皆んなの顔は色白とはいい難かつた。午前7時バスに乗車。今日は襟裳岬から登別まで10時間、バスでの強行軍である。今までの旅館の中で、最も強烈な印象を与えてくれた雨宮館をあとにした。

バスの窓から左右に見える亜麻、甜菜、大豆、小豆をめずらしく思いながら眺め、時々、かけ回つている、道産子馬の足の短かさに同情し、そして適当に睡眠をとりながら、北海道の最南端襟裳岬に到着。雨はやんでいたが、風は冷たく、前方は霧がかかり、何があるのかはつきり見えない。休憩の後浦河へ。ここで昼食。今、鳥に卵を産ませているのかと思うほど長く待たされたが、さすがにお腹が減つては文句もいわず、黙々と食事した。売店で、この名産であるこんぶを売つていたが、かさが高く、軽く、そして安いので大好評。浦河を出発して登別へ向う途中、この辺の港まつりの行列とすれ違つた。思わぬところで楽しいお祭り気分浸つた。この先まだ長時間の長旅なので、バスの中では「のど自慢」をやつた。何時あたるかしらとハラハラしながらも、指名されると美声をとどろかし、大い

にエネルギーを発散させた。しかしバスは上下左右に快く振動し、間もなく一人、二人と夢の国へ。

登別温泉第一滝本館へ到着したのは、もう夕方近くだった。階段を上つたり下つたりして、割りあてられた部屋へ。本当に大きな旅館なので一人で歩いていると迷つてしまいそうである。東洋一といわれる大浴場に入浴、食事は各部屋で久しぶりに家族的な雰囲気になつた。「熊まつり」を見学しようと楽しみにしていたが、夕方から又小雨がふりはじめ、止めにした。「明日は、からりと晴れたお天気になりますように。」と悲壯な願いをこめて、てるてる様に「オミキ」を差し上げ、今夜はここでおみやげを買うことにした。

## 「登別より洞爺湖まで」

### 短食2の1

憧れの北海道の旅も残り少く、2日になつてしまつた。7月24日、絶好の良い天気である。今日は登別から白老アイヌ部落、昭和新山、洞爺湖畔のコースをまわる。

朝6時、まだ皆疲れて寝ている頃ホテルを脱け出して、さわやかな朝の空気を思い切り吸いながら、地獄谷へと歩いて行く。足の二倍もあるような、ホテルのゲタをつつかけて歩くのに、ここではおかしくも、恥かしくもないから不思議である。地獄谷とは嫌な名前である。ここに身を沈めたものは、たちまち骨だけになるから、まさに地獄かもしれない。

地獄から天国へと、ケーブルで登り、熊牧場を見に行く。袋をゴソゴソさせると、気の早いのは人間の子供がするように、坐つて手を上げて待つている。上から投げてやると、手で口に入れて食べる。これらの情景を見ると、クマが悍猛であるとはまるで信じられない。

クマの幼稚園では、小熊が10匹ほどおり、丁度朝食が与えられるところだった。それぞれ自分の器が決つており、他人ではなく、他のクマのものを失敬すると、喧嘩になる。

私達も小さい頃は、よくそうしたものだ。残念なことに、人間様の朝食の時間になつたので、下山した。

待ちに待つた白老のアイヌ部落を尋ねた。アイヌの民芸品には、目を引かれる物があり、安くしてやるといわれれば、次から次へ、みやげものをふやす気のよい客であつた。部落